

義姉ナターシャと小姑三人

—— チェーホフ『三人姉妹』における作者の視線 ——

島田孝夫

はじめに

チェーホフ『三人姉妹』(1901年1月初演)は「モスクワへ!モスクワへ!」の台詞で有名であり、その憧憬・絶望・諦念が醸し出す独特の雰囲気知られている。

芝居の中心的な筋は、冒頭で語られる「モスクワ帰還」の夢が結果として潰れて行くことであり、それをいかに受け入れるかである。実際に舞台上で示されるのは、夢がいかに潰れるかの過程ではなくある時点での結果であり、夢の消えたことにもなう複雑な感情である。これと並行して、義姉ナターシャの"初心な田舎のお嬢さん"から"強欲・したたかな主婦"、"親ばかの母親"への変貌も事実として示されるとともに、彼女が欲するものをいかに手にするかが舞台上で展開される。姉妹との衝突摩擦はさげられない。

第四幕末尾、最後の最後になって、三姉妹はかろうじて生きる人間としての姿を現す。作者の視点は三姉妹にあるわけではない。作者はむしろ三人姉妹と義姉の間に立ち、姉妹をインテリジェントで気高い存在として共感をもって"見上げ"、逆にナターシャを俗物エゴイストとして"見下げ"ることにより、ドラマを作り出している。これに観客や読者は惑わせられ、魅惑されるのである。しかしながら、さらに奥では、ドラマ以前の人間関係を作者はしっかりと見ている。

『三人姉妹』の舞台でもっとも成果のある活躍するのは義姉ナターシャである。目前の獲物を手に入れるために努力することは不粹に見え、その犠牲者に同情したくなる。損な役回りであるがナターシャがいなければ、このドラマは成り立たない。日常生活では誰もが嫌だと思いつつもナターシャのような行動を取らざるを得ない。このことが声高ではないが、はっきりと書かれている。ただ、目立たないだけである。

『三人姉妹』を「義姉ナターシャと三人小姑」と読み替えることにより、表のドラマの引き立て役、嫌われ役のナターシャがこの作品で持つ意味を見直し、『三人姉妹』の理解を深めることが本論の意図するところである。

第一節 『三人姉妹』の執筆から上演まで

チャーホフの戯曲『三人姉妹』は、1900年8月から12月にかけて執筆され、1901年1月31日に初演された¹。作者は1860年1月17日生まれであるから、40歳の時に執筆され、41歳になってすぐに上演されたことになる。サハリン調査旅行から10年を経て、著作集²の刊行がすでに始まり、1900年1月初めには帝国科学アカデミーのロシア語・文学部門の名誉会員に選出され³、作家としての地位が確立していた。1898年9月半ばから結核療養のため黒海クリミア半島南端の保養地ヤルタに移り住み、三ヘクターほどの屋敷を購入し「領主」となっていた⁴。1901年に結婚するモスクワ芸術座の女優オリガ・クニッペルとの関係も順調に進んでいたようである。この年の冬病気療養のための外国行きを計画していたが、『三人姉妹』のために出発が大幅に遅れた⁵。

戯曲『三人姉妹』の題名と大まかな構想はすでに前年1899年9月に生まれていたと言われている⁶。モスクワ芸術座のネミロヴィッチ=ダンチェンコとスタニスラフスキーや俳優たちから新作執筆を要請されていたチャーホフは、秋になって「『三人姉妹』の主題がある⁷」と漏らしたが、今シーズンは無理だと押し通した。翌年4月にはモスクワ芸術座の公演がセバストーポリとヤルタでおこなわれ大成功を収めた。チャーホフは両方の劇場で大喝采を受けた⁸。チャーホフが本作品の執筆に取り掛かったのは、1900年8月8日、ヤルタを訪れたスタニスラフスキーとの話しのなかで、冬のシーズンのために新作を用意することで合意した後であった⁹。スタニスラフスキーは女優4人と男優（12人以下）が登場する軍人家庭が舞台の戯曲になると

1 作品13巻、注解、p. 423、440。本稿で使用するチャーホフ作品と書簡はすべてソ連時代末期に出版されたN.F. ベリチコフ監修『チャーホフ全作品・書簡集』（全30巻、モスクワ、ナウカ出版、1974-83年）による。Н. Ф. Бельчков (Глав. ред.) А. П. Чехов Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Москва, Изд. Наука. 1974-83. 第1-18巻が作品集、書簡集は第1-12巻。作品集のうち戯曲を収録した第12-13巻とシベリア旅行・サハリン調査報告を収録した14-15巻は合本である。『三人姉妹』は作品第13巻、モスクワ、1978年刊である。本文が117-188頁、校異が273-309頁、編注解が421-467頁。出典表記の簡略化のため『三人姉妹』本文はこの巻の頁と行を示す。たとえば123・4であれば第13巻123頁第4行である。それ以外の場合、作品第5巻、書簡第9巻などと表記する。また書簡はすべて通し番号がついているので巻・番号・頁を表記する。

2 スヴォーリンとの間で著作集刊行が決まったのは9月9-13日、すなわちヤルタ出発直前であった。書簡第7巻、2383番、p. 257-258、注解、p. 606。ヤルタ行きについては下の脚注参照。

3 書簡第9巻にアカデミー名誉会員証が複製されている（p. 25）。

4 書簡第7巻、2401番、p. 268。モスクワのクールスク駅から1898年9月14日、夕方6時半の列車で出発した。「領地」を購入したのは同年12月8日、2000ルーブリ、現金払いであった（同、2514番、p. 357-359）。

5 3119番。マルクス宛書簡。長期滞在による結核治療を考えていた。

6 作品13巻の注解は、この戯曲の構想はすでに1898年末-1899年初めに生まれていたとする。明確な根拠は示されていないが、この頃執筆された作品の主題が後に『三人姉妹』に反映しているということのようである。『主祭』、『谷間にて』、未完の『カレーカ』(p. 425)。

7 書簡8巻、11月24日付、ヤルタ発、2950番、p. 308-309。作品13巻、注解、p. 426。

8 セバストーポリ公演は4月10日から13日まで、ヤルタでは16日から23日まで行われた。チャーホフの『かもめ』と『ワーニャ伯父さん』のほかにハウプトマン『寂しき人々』、イプセン『ヘッダ・ガブラー』を上演した。書簡9巻、注解、p. 336。

義姉ナターシャと小姑三人

聞かされた¹⁰。

『三人姉妹』は難産であった。まず、最初の予想では9月いっぱい、あるいはもっと早く完成するはずであった¹¹。8月18日には「芝居は頭のなかに出来ており、もう流れ出て、原稿用紙に書いてくれとせがんでいる」とクニッペルに書き送っている¹²。しかし、咳や発熱など病状、訪問客が邪魔になったが、それ以上に執筆が進むにつれてさまざまな問題が生じた。オリガ・クニッペルに「今、芝居を書いている。芝居とはいえない。ただの混乱だ。登場人物が多い、道に迷って放棄するかもしれない¹³と弱気になっている。さらに9月8日には「女主人公の一人がうまく行かない(хромает)。どうしようもなく、腹が立つ」と言っている¹⁴。この登場人物は次女のマーシャだと推定されている¹⁵。

また、すでに書いたものにたいし、熱が冷めたり、訂正を加えたり、あるいは、寝かしておきたいという気持ちがつねに沸いてきた¹⁶。

チャーホフは「進行中の作品」(work in progress)について、その中心が女性三人なのか、四人なのかについて多少とも揺れがあったと思われる。当初の構想では女優四人を登場させると言っていた。オリガ・クニッペルには「四人の責任ある女性、インテリгентな女性」¹⁷と書き、コミッサルジェフスカヤには「四人の女性主演が登場する」¹⁸と手紙で述べ、他方ゴーリキーには「三人の女主人公」¹⁹と言っている。タイトルは三姉妹であるが登場するが、それとならんでもう一人の義姉が控えていたのである。単なる引き立て役ではなかった。

9 9月中(не позже сентября)に完成するという見通しについては、オリガ・クニッペル宛書簡(同、8月9日付、3118番)参照。スタニスラフスキーがチャーホフを訪問し、新作執筆を強力に要請した。同書簡の注釈参照、p. 364-365。

10 同、注解、p. 364-365。これはスタニスラフスキーからさらにネミロヴィチ=ダンチェンコに極秘事項として伝えられた。

11 「九月以後にはならない」(не позже сентября)と8月9日クニッペルに書いた。17日には「9月1-5日には仕上げる」(同、3122番、p. 100)と書いている。

12 同、8月18日、オリガ・クニッペル宛、3123番、p. 102。

13 同、オリガ・クニッペル宛、8月14日付、3121番。

14 オリガ・クニッペル宛(同、3137番、9月8日付)。9月20日にモスクワに行き、10月1日まで書き続ける、と述べている。翌日には妹に、この戯曲を書くのは「以前のものよりかはるかに困難だ」と言い、今シーズンの上演を諦めることもありうるともらしている。同、3139番、9月9日付、p. 112。13日にはギェルンベルグ宛書簡で「書き始めたばかり、いつ終わるかわからない」といいながらも、降誕祭以後ならば上演がありうると述べている。同、3142番、9月13日、p. 114。

15 全集解説は、チャーホフは当初第三幕で「筋の転換のため」次女マーシャを自殺もしくは自殺未遂まで追い込むつもりでいたとする(p. 428)。それにかわって第三幕の火事とその役割を果たすこととなったと思われる。

16 同、9月15日付、オリガ・クニッペル宛。この時期には完成がいつになるか見当がつかなかった。11月?

17 同、9月15日付書簡、3145番、全集書簡9巻、p. 116-117。

18 同、11月13日、コミッサルジェフスカヤ宛、3187番、p. 139-140。

19 同、3173番、ゴーリキー宛、10月16日付、p. 133。また初演の後ではあるが、地方劇団による『三人姉妹』の上演について、「三人の女優が若くて優秀なら、それに俳優たちが軍人を演じることができれば『三人姉妹』は成功する」と多少皮肉気味のことを従兄弟への手紙で書いている。彼はこの芝居が「地方のためには書かれていない」と付け加えた。同、3322番、3月8日付、p. 222。

『三人姉妹』の主役はたしかに三人姉妹であり、またなかの誰か一人と言うことはできない²⁰。ゴーリキー宛の手紙では、三姉妹は「それぞれ自分流に行動する」と述べていた²¹。三人は自らの置かれた日常の現実のなかで夢を抱き、その実現を"痛切に、かつ淡く"願うことにおいては共通するが、その行動での表現は各人異なっている。この三人にたいし一人で立ち向かうがアンドレイの婚約者、後に妻、さらに二人の子の母、最後に市のゼムストヴォ参事会議長プロトポポフの愛人、ナターシャである。彼女は夢など抱かずに、欲することを次々と手に入れて行くのである²²。この対照と対立、それぞれの「良さと悪さ」を、いかにさりげなく、劇に織り込むかは難しい課題であった。

またチェーホフにはこの芝居の演出をスタニスラフスキーには任せられない、稽古に立ち会わなければいけないという気持ちがあった²³。彼のリアリズム演劇では『三人姉妹』は難しいという判断であろう。これは10月末、本読みのときにチェーホフの心配していた通りになった。たびたびの遅延の後、10月23日、チェーホフは草稿を携えてモスクワに向かった。モスクワではチェーホフの草稿による本読みが直ちに始まった。そのなかで、作者の意図と演出・俳優側との食い違いが出てきた。チェーホフはこの作品を「喜劇、ヴォーデヴィル」とみなしていたが、俳優たちは深刻に、感情たっぷりに演じた²⁴。10月終わりから、12月初めにかけて、ほぼ1ヶ月半の間、チェーホフは稽古の立会い、脚本の加筆訂正に追われた。

チェーホフは12月11日、ニースに出発した²⁵。劇場側に手渡した完成清書原稿は第一幕と第二幕だけであった。残りは旅先で完成させ、郵送されることになった。16日に第三幕を郵送し、18日に第四幕がネミロヴィッチ=ダンチェンコ宛に発送された。同封の手紙には第三幕への加筆の指示が書き込まれていた²⁶。その後も書簡による修正の追加、あるいは演出の側からの注文で変更が加えられた²⁷。俳優たちも個別

20 登場人物一覧では、最初が兄アンドレイ、次がナターシャである。三人姉妹はその次に位置する。全集13巻、p. 118。脚本が単行本で出版されたときの表紙には、上の方に三姉妹を演じた女優の顔が丸枠で掲げられ、中央下でアンドレイが乳母車を見守っている。赤ん坊の顔はなく、ナターシャの影もない。作品第13巻、p. 167。

21 書簡第9巻、3173番、10月16日付、p. 133。

22 ナターシャの役どころはチェーホフの最後の戯曲『桜の園』のロパーヒンに受け継がれる。彼はラネフスキー家の農奴出身で、不動産開発業を起し、かつての女主人を破産の危機から救うために、その借金を肩代りしサクランボ園の借りて別荘開発することを提案した。彼は教養ある、分限を心得た人物として描かれる。女主人は「まあ、下品なお話し」といって取り合わない。結末の有名な場面では、一家が家屋敷を失い、馬車で去って行くところへ、サクランボの木を切る斧の音が鳴り響く。彼は前所有者が立ち去るまでサクランボ園に手をつけないという遠慮はしなかった。

23 同、9月15日付書簡。3145番、p. 116-117。オリガ・クニッペル宛。完成が11月になるかもしれないと述べ、今シーズンは上演したくないと漏らしている。

24 本読みでは、居心地の悪い沈黙が生まれ、「陽気な喜劇」という作者の意図を理解しない俳優たちは稽古で感情を込め、涙を流した。チェーホフはこれを見て「芝居は理解されない、失敗作だ」と感想を漏らしたと、モスクワ芸術座のスタニスラフスキーが回想している。作品第13巻、注解、p. 429-430。

25 正午頃、プレストを通過し、ポーランド経由でオーストリアに入った。12日にはウィーンからオリガ・クニッペルに手紙を出している。書簡第9巻、3206番、p. 150。

義姉ナターシャと小姑三人

にチェーホフに手紙を出し、稽古の様子を伝えたり、演技について質問したりしていた²⁸。

第二節 『三人姉妹』の枠組み

はじめに、『三人姉妹』理解の前提として、戯曲の構成、粗筋、登場人物について説明しておく。

時期設定は明示されていないが、1901年の観客にとってすでに過ぎ去った時代、おそらく10年ほど前の出来事として描かれているように思われる²⁹。また芝居全体は最短で4年間の歳月に渡っている³⁰。

場所は地方の中心都市で、鉄道が通じ、大きな河に面している。チェーホフ自身、「どこかペルミあたり」と言っている³¹。人口10万人の中規模都市である。この気候は「スラブ的」であると着任早々の守備隊の砲兵部隊指揮官が評している。

一家は十年前、父親の旅団司令官就任とともに、モスクワからこの地に越して来た。ちょうど1年前に父親が死亡し、芝居の第一幕はその一周忌にあたる日の出来事であった。葬儀には雪が舞っていたと長女オリガが回想する。

冒頭の舞台説明にあるように列柱のある建物、並木道のある庭など、貴族領主なみの屋敷である。この屋敷は河に面し、その対岸には森が広がっている。

-
- 26 書簡第9巻、3215番（12月18日付）への注解、p.440. 「一日遅れた」と詫びている（同、p.155.）追加したのはサリョーヌィが第三幕でトゥゼンバハを見ながら「ツィプ、ツィプ」という台詞（164・27）。
- 27 チェーホフ最終稿にあった第四幕の、決闘で殺されたトゥゼンバハの遺体が舞台奥を通過して運び出される場面が削除された。全集13巻注釈ではスタニスラフスキーの強い要請であったとする。舞台の狭さ、遺体を見送る場面の必要などの理由があったが、彼は「末尾の作者の希望を持たせるような考え（*бодрящая мысль автора*）——これは芝居の重苦しい場面を救済するものです——これがもっとも重要なもので、二兎を追ってこちらを失ってはなりません」と削除の必要性を説いた。作品第3巻、注解、p.433. しかし、チェーホフのオリガ・クニッペル宛書簡（書簡第9巻、1月20日付、3266番、p.188）によると、遺体搬出の場面はもともとスタニスラフスキーが要請して入れたものであった。
- 28 マーシャを演じたオリガ・クニッペルにたいし、第三幕のヴェルシーニンとの関係の告白は「懺悔」ではなく、「あけっぴろげにな話し」であるとして、絶望的ではなく不安げに演ずるように指示している。同、3269番、p.189. チェーホフが出発してから1月下旬まで問い合わせや演技説明の書簡は多い。例えば、3271番、p.199. はオリガ・クニッペルへの演技指導。
- 29 『三人姉妹』の時代設定が明確でないため、俳優たちは苦労した。クルィギンを演じたヴィシネフスキーは軍服や教師の制服、階級章をどんなものにするか悩んだ。チェーホフは軍隊生活の細部まで忠実に再現するよう支持していたからであった。チェーホフはヴィシネフスキーに「少なくとも第四幕では1900年以前の制服を着用する」よう指示した（同、3243番、p.174）。すると第一幕は初演時から6+ α 年前ということになる。また、下の注参照。
- 30 第一幕は一年目の5月。第二幕は一年おいた翌々年、すなわち三年目の1月、第三幕はその翌年、すなわち4年目の夏、第四幕は同じ年の晩秋——これが最短の時期設定である。その理由は以下本文で説明する。ヴィシネフスキーはチェーホフから「第一幕から第四幕のあいだ約6年が経過している」と聞いたと書いている（同、注解、3243番、p. 462）。俳優はとくにコメントしていないが、6年は長すぎると思われる。チェーホフはときどき冗談を言う。
- 31 ペルミの典拠はチェーホフの文章としてはゴリキー宛の有名な手紙（同、3173番、10月16日付、p.133）しかないようであるが、ヴィシネフスキーがチェーホフへの質問でペルミと言っているのも、劇団関係者はチェーホフから聞いていたと思われる。この男優は劇中で鉄道駅が町の中心から約20 kmも離れているが、これは大分前のことで、今は町の中まで鉄道が通じていると指摘している（同、p. 462）。

『三人姉妹』全体の時間の流れ

年次と時期	幕	年齢*	オリガ	イリーナ
一年目五月	第一幕		28	20
二年目	なし		29	21
三年目一月	第二幕		30	22
四年目夏	第三幕		31	23
同年目晩秋	第四幕		31	23

注* 誕生日不明のため、年齢はおおよそのものである。

第一幕

5月5日、日曜日。駐屯部隊司令官だった父親の一周忌があける日である。晴れた春の日にオリガとイリーナの気分は晴れやかになり、モスクワ帰還の切実な願望を語るどころから始まる。次女マーシャは不機嫌に物思いにふけている。三女イリーナの「名前の日」(誕生日に相当)の祝い客が集まり、個々の登場人物の性格付け、さらにそこに醸し出される雰囲気描写される。そこにはモスクワ行きの夢だけでなく不協和音も鳴り響いている。ヴェルシーニンが人類の未来と幸福について語り、トゥゼンバハとイリーナは労働の大切さを語るが、その傍らでこの夢への否定や懐疑が表明される。兄アンドレイは徹夜で英語の本を翻訳している。彼もモスクワ大学の教授になることを夢見ている。最後にアンドレイが恋しているナターシャが登場し、彼女にたいする姉妹の軽蔑・違和感・反感が描かれる。最後にアンドレイがナターシャに求婚する場面で幕。二人が抱き合う場面を目撃した兵士二人が困惑する仕掛けになっている。

第二幕

第二幕は、第一幕から一転しての冬の晩の出来事である。時期はリャージェヌィと呼ばれる仮装芸人が家々をめぐり歩く聖週間(降誕祭から洗礼際までの一週間)である³²。ナターシャはアンドレイと結婚しこの家に入り、二人の「小姑」と同居している。すでに男の子一人が生まれているので、早めに見て第一幕の年から丸一年隔てた二年目の年の一月である³³。ナターシャは夫に、子供の健康を理由に、オリガの部屋を子供部屋にし、多忙で家には寝るためしか帰らない長女オリガの寝場所をイリー

32 リャージェヌィについては、М Забелин "Русский народ его обычаи обряды предания суеверия и поэзия", М., 1880, стр. 10-14. 利用したのは、1990年の復刻版である。なおチャーホフには『リャージェヌィ』(1883年)というスケッチとそれにもとづく同名のユモレスクがある。全集2巻、p. 7-8. 同、4巻、p. 276-278. 仮装を本物と間違える場合と、偉そうな人物こそ仮装にすぎないと暴くものがある。

33 Wikipedia英語版の『三人姉妹』の項目では21ヶ月となっているが、同じ計算である(http://en.wikipedia.org/wiki/Three_Sisters_%28play%29, last modified 10:23, 24 Nov. 2007)。

義姉ナターシャと小姑三人

ナの部屋に移すことを要求する。夫のアンドレイは「姉妹が家を取り聞いているので、姉妹しただい」と答える。夫はゼムストヴォ惨事会の書記になっている。

マーシャはヴェルシーニンと接近した。他方では、電報局に勤務するイリーナにトゥゼンバハが求愛し、これサリョーヌィが反発しトゥゼンバハにつっかかる。これは結末の決闘の伏線である。トゥゼンバハは5年悩んだ末、軍を退役し事業を始める決意を固めつつあると表明する。

イリーナはまだモスクワ行きを疑っていない。予定の六月まであと「二、三、四、五月」と待ち遠しそうに語る。

トゼンバハとヴェルシーニンは相変わらず人類の幸福、人類の未来について議論している。ヴェルシーニンの妻は服毒自殺を図る。妻の状態を案ずる彼の姿にマーシャは腹を立てる。ナターシャがその乱暴な言葉を戒める。

アンドレイは軍医チェブティキンとともに賭博をするようになり、借金を重ねている。

第一幕はイリーナの「名前の日」であったが、第二幕は聖週間の祭日である。仮装の旅芸人が家々を回る習慣がロシアにはあり、その芸人（リャージェヌィ）が今晚来ることになっている。ナターシャは子供の風邪気味を理由によそ者を家に入れたくないと言い張る。おなじく子供体調不良を理由に直接イリーナにオリガの部屋に移るよう以来する。イリーナは理解できない。マーシャも同じ。

サリョーヌィもイリーナに愛を告白する。

ナターシャには市ゼムストヴォ参事会議長のプロトポポフが馬車での遠乗り迎えにくる。

第二幕の末尾は登場人物たちがそれぞれの方向に歩みだした。イリーナだけが、トゥゼンバハとサリョーヌィの二人の求愛を退け、「モスクワへ、モスクワへ、モスクワへ」と憧れとも絶望ともつかぬ叫びを上げるところで終わる。

第三幕

第三幕は第二幕で描かれた年の翌年の夏に設定されている³⁴。イリーナは23歳を過ぎ、「数え歳」で24歳になり³⁵、電報局の仕事を辞め今では市役所に勤務している。ナターシャには二人目の女の子が生まれている。イリーナが待ち焦がれていた前年六月のたモスクワ行きは当然のこと実現していなかった。

幕が上がると、家の外では火事が進行中である³⁶。半鐘が鳴り、窓には燃え盛る炎が映し出される。焼け出された人の受け入れ、衣類の提供、消防隊からの屋敷地通過の許可要請など火事がらみ場面があり、さらに被害者のための慈善コンサート

34 169・15で、深夜三時過ぎに、「明るくなっている」とトゥゼンバハが言う。夏であろう。

35 160・33 イリーナの台詞。「もう23歳になった」

にまで話が及ぶ。

火事は守備隊の活躍で町の一区画を焼いただけで消し止められたが、その緊迫状況のなかで、これまで覆い隠されてきたことが一挙に明るみに出される。延焼はプロゾロフ家には及ばなかったが、火は家の中に人間関係を爆発にまで追い込むのである。

まずオリガとナターシャが正面衝突する。最初は高齢の召使女性アンフィーサの処遇をめぐる応酬が、家事の主導権におよび、オリガがこの家に住むことさえ危うくなる。

兄アンドレイの賭博による借金が相当なものになり、家屋敷を抵当に入れて借金し、その金を妻ナターシャがすべて取り上げたことが明らかにされる。マーシャが、「お金が惜しいわけではないが、不当だ」と言って激怒する。

続いてアンドレイと姉妹との対決がある。口数の多くないアンドレイが居直った物言いをする唯一の場面である。マーシャだけは席を蹴って出てゆく。アンドレイは、第一に姉妹のナターシャに対する態度、第二にモスクワ大学教授になれなかったこと、第三に賭博と家を抵当に借金したことを、一方的に説明する。

火事とならんで、部隊がこの町を出て行くという噂が明らかにされる。

トゥゼンバハが軍隊を辞める決意をし、この地でレンガ工場で働くという。「働くぞ、働くぞ」。

オリガは病身の女学院長の代理を務めている。まもなく正式に校長に任命されるとナターシャが言う。

マーシャとヴェルシーニンの間には親密な関係が生まれている。それを姉妹に語る。

そして火事の混乱と興奮のなかで、オリガがイリーナにトゥゼンバハとの結婚を勧める。

第三幕の最後で、イリーナが、「トゥゼンバハと結婚する、でもモスクワへ行きましょう、モスクワより素晴らしい場所はない」と言い、最後に「オーリャ、行きましょう、行きましょう」と叫ぶ。もはやモスクワの名は無い。

第四幕

第四幕の第三幕から二、三ヶ月後の晩秋であろう。軍隊が町を出るといふ噂は事実であった。軍隊で持っていたような地方都市から部隊が撤収して行く。軍隊は

36 すでに述べたように、この火事は物語り展開上導入されあもので、マーシャの自殺（未遂）の代わりである。実際の火事がヒントになった可能性もある。執筆中にヤルタで劇場が全焼する事件があった。9月13日付のコミサルジェフスカヤ宛書簡、書簡第9巻、3143番、p. 115。「ついでに言えば、あんなものはこの地ではまったく無用の長物であった」。この手紙でチャーホフは、芝居を書き始めたが、放置してある。机の上で仕事を再開するのを待っている。何時できるかはまったく分からないと言いつつも、10月に完成するかもしれないという予感を表明している。

義姉ナターシャと小姑三人

くすんだ生活に唯一華をそえる存在であった。軍隊とともに生きてきたプロゾロフ家にとって一時代が終わったという寂しさはどうしようもないものであった。しかし、姉妹にとっては過去からの解放でもあった。

オリガは校長になり、すでに家を出ていた。彼女は年老いたアンフィーサ引取り官舎で一緒に暮らしていた。

イリーナのトゥゼンバハ男爵との結婚は明日である。この日の昼、彼女は荷物を運び出す荷馬車の到来を待っていた。

マーシャの不倫相手ヴェルシーニンは彼女との関係の終わりを受け入れていた。プロゾフォフ家を訪れた彼は「マリヤ・セルゲーエヴナはどこにおられますか」と改まった口調で言う。これは彼の「哲学のお喋り」とはことなり、万感のこもったものであった。マーシャは辛い気持ちを切れ切れに詩句を口ずさんで表現する。

これと較べると、夫クルィギンは髭をそった顔に付髭をつけて、ドイツ人に似ているとおどけている。部隊が出て行くのを喜んでるのはクルィギン一人だと、トゥゼンバハが見透かしている³⁷。

前日街でトゥゼンバハとサリョーヌイの間で何かあったことを聞いている。サリョーヌイがイリーナとの結婚のことでトゥゼンバハにつかかり、口論が罵り合いになり、サリョーヌイが決闘を申し込み男爵がそれを受けたのであった。決闘は今日の12時半に設定されていた。

イリーナとトゥゼンバハの間に長い会話があるが、イリーナに男爵のメッセージが伝わらない。彼女は「行かないで」「私も行く」と言っただけで、舞台奥に退きブランコに腰掛ける。

チェブトィキンが決闘でトゥゼンバハが殺されたことをオリガに耳打ちする。オリガがイリーナに囁く。イリーナは「分かってたわ、分かってたわ」とつぶやくだけである。

対照的なのはナターシャである。邪魔な三姉妹が家からいなくなり、目障りな軍人の出入りもなくなる。

一方、召使女アンフィーサは校長に就任したオリガのおかげで、官舎のアパートで一部屋もらって住める幸せを語る。

最後に、三人の姉妹がこれからどう生きるかを独白で語る。

第四幕は『桜の園』(1904年)に似た雰囲気を持っている。

第三節 義姉ナターシャと小姑たち

ナターシャ — 純朴で野暮な地元のお嬢さん

ナターシャが登場するのは第一幕の最後の場面であるが、ほぼ半ばで姉妹の話題に上る。その日の朝、恋をしている兄をからかったという話しをきっかけに、そ

の相手ナターシャを次女マーシャがこき下ろす。イリーナは「地元のお嬢さん」とだけしか言わないが、マーシャは辛らつである。「まあ、何て服装するんですかね。綺麗じゃないとか、流行遅れとかじゃなくて、ただ衰れって感じよ。何か奇妙な、けばけばしい、黄色っぽいスカートに、下品なタフトがぶら下げて。それに赤いブラウス。おまけに頬ときたら風呂上りみたい、風呂上りよ。」マーシャは自分の兄がこのような女性に本気で恋しているとは信じられない。「兄だって好みがあるんだから。きっと私たちへの嫌がらせで付き合っているだけ。昨日、市長のプロトポポフと結婚するって聞いたわ。上出来よ」(129・35-130・1)。プロトポポフも嫌われている。

ちなみに第一幕ではオリガは青、マーシャは黒、イリーナは白のドレスである。劇中ずっと三人はこの色で通す。

ナターシャはこの日「ピンクのドレスに緑の帯」といういでたち(135・34-35)。もう他の客が集まっているのを見て、鏡の前で服装や髪を直しながら、人前は恥ずかしいという(135・34-41) オリガにも「どぎまぎする」という(136・4-5)。オリガは「沢山。みんな身内だから」と返事をしながら、ナターシャの服装について一こと言う(136・6-7)

オリガ：(驚いて) 緑の帯だわ。あなた、よくないわ。

ナターシャ：なにか縁起でも悪いんですか。

オリガ：いいえ。ただマッチしないだけ... それにどこか変だわね。

ナターシャ：(泣き声で) 本当?でもこれ、緑じゃなくて、ケシ色なんだけど。

たまたま訪れて居座ったヴェルシーニンがその場で晚餐に招待されると、ナターシャは「この家は手軽なのね」と独り言(136・34)。これはクルィギンがこの家に抱いている違和感と似ている。

食卓でクルィギンが「テーブルに13人いる!つまり、恋人同士がいるんだ」と冷やかすと、ナターシャは食堂を飛び出してしまふ。「私、恥ずかしい。みんなが私に何をしているか分からない。私を笑い者にしている。テーブルを離れたのはお行儀がわるかったけれど、堪えられない、堪えられない」(顔を両手で覆う)(137・35-38)。

アンドレイが、悪気はない、冗談を言っているだけだ。みんないい人たちだと慰める。そして、どうして恋したのか分からないがと呟きつつ、「若さ、素晴らしい、美しい若さよ」といってナターシャをほめ、「優しい、純粋なひと」と言いながら、ナターシャに結婚を申し込む(138・7-13)。

父の死後、モスクワを夢見て地方都市の沈滞の重圧のもとで暮らす一家に、二人の闖入者が現れた。一人は新任の砲兵隊指揮官ヴェルシーニン中佐、もう一人はアンドレイの恋人ナターシャ。ナターシャが姉妹によって拒否されるのにたいし、ヴェ

義姉ナターシャと小姑三人

ルシーニンは「モスクワから来た」という理由で、また知的な会話をリードできるという理由で、顔を出したその日に受け入れられた。モスクワに行けぬ家庭の事情があるマーシャは、口笛や鼻歌で不機嫌さを表明し、さらに晚餐まで自宅に帰っていると言って辞去する寸前、ヴェルシーニンの話を聞いて帰宅を中止した。軍人が一家の団欒に入り込んで、父のいた華やかな時代と、昔のモスクワ暮らしが甦り、そしてモスクワ行きの夢がふくらんだ。アンドレイのナターシャへの求婚もこの勢いによって行われたのかもしれない。

ナターシャの変貌

第二幕に入るとナターシャは純朴な乙女から相当したたかな妻・母親に変貌している。第一幕からすでに2年かそれ以上の時間が経過し、男子が一人生まれている。夫に言いたいことがあると、みずからさりげなく機会を作る。夜8時過ぎ、ナターシャは蝋燭をもって家の中を見回っている。この場面、スタニスラフスキー演出では「蝋燭を消したり、家具の下に泥棒がないか」チェックするようになっていたようである³⁸。夫にたいし、オリガとイリーナがまだ帰宅していないことを強調し、つづいて乳児ボービックの調子がよくないことを言う。「健康状態がよくない。今日は体が冷たい。昨日が熱があったのに、今日は全身が冷え切っている。」それを理由に聖週間の門付け芸人を入れられないほうがいいという。アンドレイは「万事、姉妹次第だ。この家じゃ、妹たちが、主人なんだ。」ナターシャは義姉妹を優しく物分りのよい人たちだと持ち上げ、アンドレイに痩せるためのダイエットを勧めたあと、いよいよ本題に入る。

ナターシャ：（間をおいて）ボービックの体が冷たい。部屋が寒いからじゃないかしら。温かい季節になるまでいいから、あの子を他の部屋に移したい。たとえばイリーナの部屋なら、子供にぴったり。乾燥していて、一日中陽が当たる。しばらくオリガと一緒に部屋にいてもらえないかとイリーナに頼まなければいけない... 家に帰っても寝るだけなんだから。

アンドレイはただ黙り込むだけである。引き際に、ナターシャは、役所から書類を届けに来たことを伝えに来ただけだと、一言。すなわち、この台詞でこの場面が上述のようにナターシャの意図したものであった。

ナターシャ — 来客撃退は徹菌撃退？

ナターシャとマーシャの関係は第一幕を受けてさらに反目・衝突へとエスカ

38 書簡第9巻、3239番、スタニスラフスキー宛、1月2日付。これは遅れて届いた彼の12月23日付書簡への返事。スタニスラフスキーはナターシャに蝋燭や泥棒は彼の演出である（作品第13巻、注解、p. 457）。

レートする。この二人は対極に位置する。この晩はみんなが集まることになっていた。マーシャと常連はもう集まっていた。ところがヴェルシーニンが妻の服毒自殺未遂で自宅によび戻されてしまう。マーシャは不機嫌になる(149・22-30)。アンフィーサに当たり(149・34-37)、トランプ占い(パシアンズ)のカードをめちゃくちゃにする(149・41-43)。マーシャはさらに軍医チェプトイキンに当たる。「あんた、子供みたいね。いつもくだらないことばかり言ってるわね」(150・6-7)。これはイリーナへの当てつけでもあろう。ナターシャがマーシャに注意する(150・9-13)。

ナターシャ：(息を吸ってから) マーシャったら。どうしてそんな言い方をするんですか。あなたのような外見の美しい方でしたら、ちゃんとした社交の場で、そんな言葉を使わなかったら、ほんとうに魅力的なのに。(フランス語で)許してくださいね、でもあなた、行儀作法が粗暴だわ。

ナターシャはこう言う「子供が目を覚ましている」といってその場を去る。

モスクワに大学がいくつあるかをめぐり冗談のあと、ナターシャが入ってきて、チェプトイキンになにか囁く(152・26-28)。これがほかにも伝えられる。リャージュヌィの来る晩の徹夜のお祭り騒ぎがだめになる(152・32-153・3)。トゼンバハマで帰ろうとする。

イリーナ：でも仮装芸人が...

アンドレイ：連中は来ない。ナターシャの言うには、ボービックの調子がよくないんだ。私には分からぬが... 俺にはどうでもいいことだ...

「ボービックが元気ないですって！」

イリーナ：(肩をすぼめながら) ボービックの体が悪いですって！152・38

マーシャ：そんなことどうでもいいじゃない。帰れっていうなら帰りましょう。(イリーナに) 病気なのはボービックじゃなくて、ナターシャ後本人よ... これよ(指で額を叩く) 俗物女³⁹は困るわ。

ナターシャの「親ばか」ぶりはサリョーヌィの極端な反応を引き起こす。

ナターシャ：乳呑児も母親が分かる。親ばかかしら。ボービックは特別な子だわ。

サリョーヌィ：俺の子だったら、炒めて食ってしまう。

ナターシャとイリーナ — オリガとの同室の要求

39 俗物女。メシャニーン(男)、メシャーンカ(女)とはもともとロシア帝国の「町人身分」を指す。軽蔑語として小さな利害にあくせくする視野の狭い人物、俗っぽい、下品な人物を意味する。

義姉ナターシャと小姑三人

このサリョーヌィは相当の変人として描かれているが、彼はイリーナに恋していた。ついに告白する(154・7-31)。そこへナターシャが蠟燭をもって顔を出す(154・32)。サリョーヌィは「どうでもいい」といって出て行く。154・37 ここで二人のあいだに部屋をめぐる会話がはじまる(154・38 - 155・11)。

ナターシャ： 顔色が悪い、早くお休みになったほうがいいわ。

イリーナ： ボービック、よく寝てる？

ナターシャ：寝てまう。でも穏やかじゃない。

ところで、あなたに前からお願いしたかったの... ボービックはいま子供部屋にいるけれど、あそこは寒くて湿っぽいような気がする。ところがあなたのお部屋、子供部屋にぴったりなの。お願い、しばらくオーリャの部屋に移ってくださらない？

イリーナ： (理解できない) どこへですって。

ナターシャ：しばらくの間、あなたにオーリャと一部屋にいてもらい、あなたのお部屋をボービックの部屋にする。あの子、とっても可愛い。今日、「私のボービック」と声をかけたら、可愛いお目々で私を見つめたわ。

この部屋問題、中断されたまま終わる。アンドレイが頼りないので、ナターシャは直接ナターシャに掛け合ったのであった。イリーナは「理解できない」という表情を示しただけだった。

まず、イリーナにボービックの様子を尋ねさせ、部屋移動の話題を出しやすくした。イリーナとしてはサリョーヌィから求愛をうけるところを見られたという動転・引け目があり、話題をナターシャの弱みに移そうとしたわけであるが、ナターシャの思う壺となってしまった。

観客はナターシャ=悪役、親ばか、ボービックはその道具というイメージを、他方で三姉妹は同情すべき気高い存在というイメージを持っているため、このナターシャの台詞に「この馬鹿女、凶々しいにもほどがある。よくもまあ、そんなことが言えるな」と反応してしまう⁴⁰。

直接の効果は、観客の三人姉妹への共感と自己投影がいよいよ深まることである。作者は後に見るように、さらにナターシャを姉妹の、そして観客の嫌われ者にしてゆく。ロシアではインテリゲンツィアへの尊敬はきわめて深い。モスクワ芸術座へ足を運ぶような人々のほとんどはインテリゲンツィアか、インテリゲンツィアへの尊敬を抱いている人々であろう。彼らは姉妹に見方し、ナターシャに敵意に近い反応

40 このようは反応は筆者のものでもある。ロシア人にさりげなくナターシャについて意見を求めると、例外なしに、ナターシャは徹底した悪者である。初めて『三人姉妹』を読んだときも、そして何度も読み多少とも作者の意図を理解したと思う今でも、この箇所ではイリーナになりかわりナターシャに向かって「いい加減にしろ!」と言いたい気持ちを禁じえない。以前、モスクワの某劇場で『三人姉妹』を見たが、まだ読み初めの頃であったため観客を観察する余裕がなかった。

を抱いている。そのナターシャが良い部屋を要求するのである。

「陽当たりのよい、乾燥した部屋」の意味

ナターシャの意図はどうあれ、いやナターシャがたとい悪意の固まりであったとしても、もし子供部屋の変更が実現すれば、彼女は子供のために日当たりのよい、冷えない部屋を確保することに成功するのである。このような部屋は結核の最良の予防であった。

作品を離れると、周知のようにチェーホフは医師であり、結核やその他の伝染病の蔓延から住民を救うために努力を惜しまなかった。彼自身結核を病み、『三人姉妹』執筆は病魔との闘いのなかで進められたといっても過言でない。比較的気候が温暖なヤルタは結核保養地と知られ、外国に行けない患者が多数集まっていた。チェーホフは1900年3月10日、スヴォーリンにヤルタから次のように書き送っている。「ここにはなんと肺病患者が多いのだろう。何という貧困だ、そして彼らはなんと不安なことか。重病患者はホテル、アパートで受け入れてもらえない。どんな物語がここにあるかご想像いただけたらと思う。人間が力つき、状況のゆえに、まったく見捨てられた状態で死んで行く。これが有名なタブリーダで起きていることなのだ。この地の太陽、海を見る気も失せるほどだ。」⁴¹

このような結核の罹病率と死亡率の高さ、医者としての関心からすると、この「湿気の少ない、温かい部屋」は現実世界との接点であり、いわば本気で入れたものであった。これをナターシャに言わせたところが極めて興味深い点である。ナターシャにとってはおそらく良い部屋を姉妹から奪うための口実にすぎず、真摯なものではないと姉妹に受け止めさせている。しかし、仮に、たとえばイリーナかヴェルシーニンに言わせたとしても立派な説教になるだけで、モスクワ行きや幸福論議と同じように現実味の薄い話になっていただろう。夢ではなく、目の前の具体的な目標を定めて先を読む動くナターシャに作者は結核予防を託したとも言える。

このことはさらに深い意味を持つ。一つは、言動の評価はそれをなす人間の身分、品格、美醜と切り離されるということである。「善」はどこから来るか分からない。「善を説く善人」ほど恐ろしいものはない。ナターシャを作者は徹底的に俗物として描き、赤ん坊の体調不良も結核予防もマーシャとイリーナが感じるように嘘か「気のせい」かもしれないのである。チェーホフは1900年1月にスヴォーリンへの手紙で「俗物、俗物根性」という言葉は意味を失ったと書いていた⁴²。

第二に、作者は、観劇の芸術的感興が薄れる頃、観客の胸中に子供のための結核予防措置が思い浮かぶことを期待していたのかも知れない。芸術を手段として、

41 書簡第9巻、3071番、p. 71.

42 同、3012番、p. 23. チェーホフの庇護者で新聞『新時代』の発行人は劇作家でもあった。これは彼の執筆中の作品『女主人公』を批評した言葉（同、p. 269）。

義姉ナターシャと小姑三人

革命的変革ではなく、具体的な改善が、きわめて間接的な方法で、観客の胸中の移されるのである。『三人姉妹』には観客の目が舞台上に移されたり、反対に舞台が観客の側に広がる傾向を持っている。

『谷間にて』のアクシーニャとリーパ

この点で、『三人姉妹』の直前に執筆された短編『谷間にて』が、自己完結性の高い短編と舞台の違いも含めて、対照的な例を示している⁴³。この作品も家庭内の女の闘いを描いている。村で雑貨屋の次男の妻アクシーニャは、長男の新妻リーパの目には「今はアクシーニャが一番怖い。普通で、いつも笑っている。でも時々窓から外を見ている。彼女の目は怒っていて、燃え盛っている。まるで羊小屋の羊の目」と映った。彼女は義父の所有する土地で煉瓦工場を経営すること義父にもちかけるが、「俺の目の黒いうちは許さん」と断られる⁴⁴。アクシーニャはその土地が長男夫婦のものとなることを恐れ、彼らの子に熱湯をかけて死に至らしめ、彼女を追い出す。最後にはレンガ工場を建てその経営を一手に握り、この地域の大家となる。さらには義父とその後妻をも追い詰めて行く。この作品では長男の妻リーパとその母の聖人的な忍耐、労働（レンガ運び）の姿、そして義父にたいする救しが救いとなっている⁴⁵。「やり手」の女性のなかには、残酷な、罪ある存在がありうる教訓である。救いは踏みつけられた犠牲者の側からやってくる。この救いによって短編は完結する。

しかし、『三人姉妹』のナターシャにおいては犠牲も救いもなかった。良くも悪くもただ生々しいエゴイズムがあるだけ、いつまでも存在しつづける。これが姉妹をいらだたせ、最初の恥じらい深い女性に恋をしたアンドレイの誤算であった。

アンドレイはチェブトキンと賭博にそっと出て行く(153・16-37)。

このとき、鈴をつけたトロイカが近づいてくる。呼鈴の音。小間使いが、プロトポポフの迎えをそっと耳打ちする。ナターシャは気にかける様子もなく言う。

ナターシャ：プロトポポフさんですって？変わった方でしょう。プロトポポフさんがいらっしゃって、私を遠乗りにお誘いだそう。(笑って) 殿方って変わってますわね。

このあとイリーナは物思いにふけている(155・23)。部屋のこと、ナターシャとプロトポポフのことを、そしてナターシャに手玉に取られたことを考え、モスクワの夢が遠のいて行くのを感じていたに違いない。子供の結核予防はおそらく頭にはなかっただろう。

43 『谷間』(Объём)は1899年11-12月、『仔犬をつれた奥さん』の直後に執筆され、翌1900年雑誌『生』(合法的マルクス主義的傾向)の1月号に掲載された。作品第10巻、注解、p.431、433。煉瓦工場は三人姉妹に受け継がれた。ここでは鉄道建設にともない煉瓦が高騰し、工場が利益を出している(同、p.177)。

44 同、p.161。

45 同、p.177-180。アクシーニャに食べさせて貰えないで衰弱している義父に、母親とともにレンガ運びの重労働をしているリーパが黙って食べ物に分けあたる場面。

マーシャとヴェルシーニン

そこへクリギン、オリガ、ヴェルシーニンが登場する(155・23-24)オリガは職員会議が長引いてようやく帰ったのであった。オリガは、病気の女学院長にかわって院長代理になったこと報告する(155・34-35)。例によって「頭が痛い、頭が痛い、頭が...」と言って座り込む。頭痛の原因は重責だけでなく、アンドレイが昨日カード賭博で200ルーブル失ったこともある。しばらくして早く横になりたいと言って出て行く。「明日は何もない、明後日もなにもない、頭が痛い、頭が...」(156・20-24)ヴェルシーニンの妻の自殺未遂があったが、今回も大事にはならなかった(156・4-6)。マーシャの姿はない。ヴェルシーニンはクリギンにどこかへ行こうと誘うが、クリギンは辞退する(156・8-10)。ヴェルシーニンは口笛を吹きながら出て行く。マーシャへの合図である。ナターシャはプロトポポフとの遠乗りに出て行く。一人残されたイリーナは憂愁のこもった憧れの気持ち(ロシア語でタスカーという)「モスクワへ行く、モスクワへ行く、モスクワへ」と叫ぶ。

第二幕末尾(153・39のイリーナ登場以下)はそれぞれの登場人物の置かれた状況、複雑にからみあった人間関係をみごとに舞台化したと言える。

オリガとナターシャの対決

第三幕では主として長女オリガがナターシャと激突する。兄アンドレイが姉妹にたいして居直った説明をするのもこの幕である。

進行中の火事の混乱・緊張を背景にした二人の衝突はきわめて迫力のあるものである。劇中、登場人物たちのほとんどの台詞は「気分のドラマ」⁴⁶にふさわしく計算された空間をゆっくりとあるいはすばやく飛び交うが、この場面でナターシャは「声を荒げて怒鳴り」、その言葉は生身の肉体性を帯びている。姉妹にとってこれは家庭内の火事、「火宅」であった。

まず召使のアンフィーサをめぐる二人は言い争う。オリガが夜の火事で焼け出され者のために自分の衣服を分け与えようとする。80歳を越えたアンフィーサはもはや対応できない。すでに家のなかで「邪魔だ」「出てゆけ」という声を浴びせられていた。オリガに追い出さないでくれと懇願する(158・19-22)。オリガは誰もアンフィーサを追い出しはしないと断り、椅子に腰を下ろさせる。

そこへナターシャが登場する。焼け出された人々を救済する協会を作ろうと彼女は提案する。座っているアンフィーサに気づく(158・36-40)。

46 批評家、文学回想作者として有名なI. F. アンネンスキーが『三人姉妹』を論ずるときに使った表現。『反映の書』(1906年)に掲載された「気分の劇」と題するエッセー。三人姉妹論は1905年6月には執筆が終わった。Серия "Литературные памятники" Иннокентий Фанненский М. "Наука", 1979のインターネット版を使った。http://as.lib.ru/a/annenskij_i_f/text_0330-1..shtml ファイルの更新日は04/11/2006。

義姉ナターシャと小姑三人

ナターシャ：私の前で座らないで！立ちなさい！出て行きなさい！

アンフィーサが退場するが、ナターシャは矛先をオリガに向ける(158・42 - 159・4)。

ナターシャ：あんな老婆、どうして置いておくんですか。私には分からない。

オリガ：（口ごもって）ごめんね、私にも分からない...

ナターシャ：あんな老婆、なんの役にもたたない。百姓女でしょ。田舎に住むべきよ...。なんで甘やかすんですか。私は家ののなかに秩序があるのが好き。余計な人は家にいるべきじゃないわ。

この「余計な人」はナターシャの本音である。ナターシャ自身もそれに気づく。鈍感な女性ではない。夢で生きる人々とことなり、自分は人間関係の網目の中に根を張って生きていることをオリガに見せ付ける(159・5 - 9)。

ナターシャ：（オリガの頬をさすって）あなた、可哀想、うちの院長先生、疲れているわ。ソフィヤが大きくなって学校へ行くようになったら、あなたが怖いわ。

オリガ：私は院長にはなりません。

ナターシャ：任命されます。もう決まってるんです。

オリガの女学院長就任は、プロトポポフからの情報であろう。それどころか、ナターシャ自身が市ゼムストヴォ参事会議長（市長）に頼み込んだと考えた方が、ナターシャらしい。

オリガは校長にはなりたくない、任命されても拒絶すると言ったあと、水を飲んで気を取り直し、矛先をアンフィーサからナターシャ自身へと向ける(150・9-13)。

オリガ：あなた、さっき婆やにたいして粗暴に振る舞ったわね。失礼、私には堪えられない...。目の前が暗くなって来た...

オリガの口癖は「疲れた、頭が痛い」であるが、ここでは目が眩んでいる。身体レベルで反応するのである。マーシャは彼女流の仕方で、怒りを露わにして出て行く。オリガは続ける(159・15 - 17)。

オリガ：ねえ、あなた、私たちは教育うけてるんだから、変かもしれないけど、私にはあんなこと堪えられないわ。ああいう振る舞いは私の痛めつける。病気になってしまう。ただもう気分が落ち込んでしまう...。どんなに小さくとも、粗暴さ、思慮にかける言葉は私の心を乱す。

オリガのよりどころは「私の心」である。ナターシャははじめ批判を受け入

れるかのである。気分を悪くさせるつもりはなかった。「自分はいくら余計なことを言ってしまう」と低姿勢である(159・13, 21)。しかしすぐに反撃にでる。アンフィーサが80歳を越えて、役に立たない、村に住まわすべきであるという(159・22)。オリガは30年もこの家にいた人だから、いくら年をとって働けなくなったとしても追い出せないという(159・23)。ナターシャは「私があなたを理解できないのか、あなたに私を理解する気がないか、どちらかだわ。」働けないし、寝るか、座っているだけ(159・25-7)。

オリガ：座らせておけばいいでしょ。

ナターシャ：（驚いて）座らせておくってなんですか。だって召使じゃないですか。（涙ぐむ）私には理解できないわ。私には身回り係りがいるし、乳母もいる。小間使いもいるし、料理女もいる。あんな老婆、いったい何のために要るんですか。なんのためですか」

舞台裏で半鐘がなりひびく。(159・28-34)

この半鐘は象徴的である。オリガは「一晩で10歳は老けた」(159・35)といってこの話を切り上げようとするが、ナターシャにとっては本音を吐く合図であった(159・36-161・7)。

ナターシャ：オーリャ、私たち、徹底的に話しあう必要があるわ。きっぱりとね。あなたは女学院で働き、私は家にいる。あなたの仕事は教育、私の仕事は家の取り仕切り。私が召使のことを言うのは、ちゃんと分かっているからよ。私は自分の言__っ__て__る__こ__と__がちゃんと分かっているんだから。明日にはあの泥棒女、くそババア...（足を踏み鳴らす）あのバケモノ女がいなくなってるようにして下さいね。間違っても私をいらだたせないで。間違っても...（われに返って）ほんと、あなたが下の階へ移ってくれなかったら、いつまでも口論だわ。とても我慢できない。

オリガは教養ある振る舞いの粋を出す言動に身体的、神経的にまいってしまう。それでも、オリガはなんとかナターシャに注意する。それがナターシャの圧倒な肉体的言語による決定的反論を招き、アンフィーサを追い出し、家は自分に任せて口出しせず、目に付かないところに移れ、と要求されたのであった。

ナターシャ — 「マクベス夫人」

火事場のような混乱はそればかりではなかった。軍医チェブトイキンが誤診で患者を死なせたことへの悔悟の念を示したかと思うと(160・26-39)、故意に陶器

義姉ナターシャと小姑三人

の時計をこなごなにし、「そう見えるだけだ」とうそぶく(162・19-20)。ナターシャとプロトポポフのロマンスがあるが、みんな知らぬふりをしていると言う(162・26-33)。サリョーヌィはトゥゼンバハにくってかかる。軍隊をやめ私服にもどったトゥゼンバハはレンガ工場に勤めるといい、さらにイリーナに求婚するが取り合ってもらえない。マーシャはヴェルシーニンとの関係を告白する⁴⁷。

その最中、ナターシャが蠟燭をもって黙ったまま右から左りへ通り抜ける(168・26-27)。この場面をチェーホフは、ナターシャは「マクベス夫人流に、黙って、真っ直ぐに、何も、誰をも見ないで通り抜ける」と指示した⁴⁸。純朴・無粋な乙女がオリガにたいする一方的勝利の後でマクベス夫人にまで変貌している。これを見たマーシャは「まるで放火したみたいに歩きまわっている」と言ってオリガにたしなめられた(168・29-30)。

アンドレイと三姉妹

マーシャはアンドレイが家を抵当に銀行から大金を借りたが、その金を妻ナターシャが取ってしまったと秘密を暴露する(165・25)。「この家はアンドレイ一人のものでなく、私たち4人のものなんだから」ちゃんとした人間なら、分かっているやいけ(165・29-31)。さらに部隊の移動のうわさがあることヴェルシーニンが明らかにする(162・10-15)。イリーナはモスクワ行きの夢が実現しそうもないことを感じている。それにとどめを刺すようにオリガはイリーナに男爵との結婚を勧める(168・5-14)。軍服を脱いだら「泣きたくなくなるような醜男」だけど、きちんとした人物である。「結婚するのは義務で、愛情がなくても結婚する。私もそうする。」(168・5-14、18-25)。イリーナはモスクワへ移ったら「本当の男の人」に会えると思っていたが、いまではなんだかわからなくなってきた(168・15-17)。

アンドレイも「マクベス夫人」の指示をうけたかのように三姉妹にたいし、自分の立ち場、ナターシャ弁護を展開する。その内容は居直りであるが、ナターシャ的であるために反論を許さない(170・7)から、例によってマーシャは途中で席をはず

47 マーシャはヴェルシーニンが火事で自分の家族が混乱に陥ったことを話しているときに登場する(163・1-18, 163・13)。彼お得意の三姉妹のようにまともな人間が増えると社会は良くなると一席ぶったあと163・18-24、今日は気分がいい、「愛に年齢はない、愛の爆発は良いこともたらず」という。そしてマーシャとトララ、ララと掛け合う(163・39-164・2, 164・22-23, 170・16)。これは二人の関係の公然化であり、最後の例は二人の合図であった。これは実際にチェーホフのいる席である女優が自分が想いを打ち明けるときに使ったものであったという。チェーホフは大笑いし、気に入った、作品で使うと言ったそうである。全集13巻、注釈、p.423-424。またトゥルコフの『三人姉妹』論を参照(A. Ф. Турков, «А. П. Чехов и его время», М., 1987, стр. 463)。

48 簡、9巻、3239番、スタニスラフスキー宛。1月2日付。これは遅れて届いた彼の12月23日付書簡への返事。スタニスラフスキーはナターシャに蠟燭を消したり、家具のしたに泥棒が隠れていないか点検させたいとチェーホフに書いた。この返事を受け取ったスタニスラフスキーは第二幕の冒頭の場面と間違えたと言った(注釈、p.457)が、笑いを取りたかったのかもしれない。いずれにせよ、「マクベス夫人」を引き出したのは彼の手柄である。

す。ヴェルシーニンからトララの合図があり、明日にしなさいと言って、出て行ってしまふ(170・16-20)。

オリガは女学院へ、マーシャはヴェルシーニンのもとへ、イリーナはオリガの勧める男爵との結婚(168・5-14)に同意する。

「でも、オーリャ、モスクワへ行きましょう。この世にはモスクワより素晴らしいところはないわ」(171・30-34)。

第四節 ナターシャの勝利

第四幕は軍隊の引き上げ、兄弟姉妹の独り立ち、トゥゼンバハの死を描く。ナターシャにとっては、一人勝ちであった。主婦の座、夫への優位、財産処分権が手に入っただけでなく、じゃまな姉妹、召使、目障りな軍人がいなくなる。家屋敷を思い通りに変えて行くことができる。子供たちの健全な成長も約束された。その分だけ、作者はナターシャを辛らつに描きだす。

この日は町を出て行く守備隊との別れの日である。准将であった父の家族は部隊の存在と深く結びついていた。昼、つぎつぎと別れの挨拶に軍人が訪れるが、重要事件はすべて舞台の外で起きる。舞台上ではアンドレイが子守をするだけである。
174・17

イリーナの門出

愛のない結婚を控えたイリーナに喜びはない。大通りで何か不吉な事件があったことだけしか知らない(174・19-21)。チェブトィキンは知らぬふりをするが、クルィギンが伝聞したことを伝え、説明する(174・22-31)。ついでに余計なことまで言う(174・32-40)。

サリョーヌィはイリーナに恋をしていて、男爵に嫉妬した憎んでいる。イリーナは可愛い子だ。マーシャに似ている。二人とも物思いにふける傾向がある。ただ性格はイリーナのほうが優しい。でもマーシャもいい性格だ。僕はマーシャを愛している。

イリーナが不安をかきけすように、自分の境遇を語る。男爵との結婚のこと、二人で煉瓦工場へ行く。男爵はそこで勤務し、イリーナは学校の教師となる。そのためにイリーナは教員試験を受け、合格していた(175・2-10)。

チェブトィキンは「飛べ、飛べ」と激励か冷やか分からないことを言う(175・16-20)。クルィギンは「理念だけだ、真剣みが足りない、でも心から成功を願う」(175・13・15)

乙女の祈りが聞こえてくる(175・37)イリーナは「明日の晩はもう『乙女の祈り』を聞くこともない」と呟く。劇中、この台詞ほど多義性を帯びているものはな

義姉ナターシャと小姑三人

い。イリーナは「明日はもうここに居ない」、「この好きな曲が聞けないのが残念だ」、あるいは「演奏が気に入らない⁴⁹」、「弾いている者が気に入らない」から助かる、と言いたいのかも知れないのである。ベートーヴェンの「乙女の祈り」がイリーナの門出の曲にふさわしいどうか分からないが、ピアノはナターシャが今日もやって来て客間にいるプロトポポフのためなのである。ナターシャのことに頭から離れない。

イリーナの独白。オリガが女学院長となって官舎に移ってから、自分はこの家で暮らしにくかったことを語る(176・7-20)。

「私は一人で退屈。何もすることがない。それに今いる部屋がとっても嫌い。そこで考えた。もしモスクワに行けないのが運命ならば、それでいい。運命だわ。どうしようもない。すべては神の御心のまま。そのとおりに。男爵が結婚を申し込んでくださった。どうしようかと考えて、お受けしました。いい方です。驚くほどいい方です。すると私の心に翼が生えたようになり、快活になりました。また働きたくなりました。働きたい... ただ昨日何か事件があって、私の心の上には謎がぶら下がっている。176・7-20

これを聞いたチェブティキンは一言、「くだらない！」(176・21)。

マーシャ —— 自己認識とアンドレイ批判

マーシャの独白(177・1-9)は自分について語り始め、アンドレイにたいする批判となる。幸福を切れ切れに、断片的に手にしてゆき、そして私みたいにそれを失うと、すこしずつ粗暴になる。怒りっぽくなる。(自分の胸を指差す)ここは煮え立っているは。(乳母車を押ししているアンドレイを見て)あれがうちのアンドレイよ。兄ちゃんよ。希望はぜんぶ潰えた。何千人が彼を押し上げようとした。お金とエネルギーをかけた。ところが彼は突然落下して壊れてしまった。突然よ、何の前触れもなくね。そういうのがアンドレイよ。

アンドレイも劇場傍事件を知らない。チェブティキンはアンドレイには簡潔な説明。レールモントフ気取りのサリョーヌィにとってこれは三度目の決闘になる(177・26-34)。マーシャ、アンドレイは決闘は不道徳(178・11-13)、マーシャは決闘をやらせてはいけない、という(178・1)他方、チェブは男爵の一人くらい、いてもいなくてもどうでもいい(178・4)、としらく顔をし、この世の中、何も存在しない。ただ存在するように見えるだけだ(178・14-16)とシニックである。彼は決闘に立ち会うのである。

49 「乙女の祈り」は初心者がここまで上達したとって得意げに弾くことがある。これほど嫌なものはない。マーシャとトゥゼンバハはもっと熟練したピアニストであった。注。

チェブトィキンのシニクな言葉は、マーシャ自身の身辺への態度のとり方をずばり衝いたものであった。マーシャはこれに腹をたてる(178・17-23)。

マーシャ：そういうふうに一日中しゃべってるんですね。(歩きながら) こんな風土に住んでいると、時間がたって、雪が降ってもまだ相変わらず同じ話しをしてるわ。(立ち止まって) もう家の敷居はまたがない。近づくことさえできない。ヴェルシーニンさんが来たら、教えてください。(並木道を歩く) もう渡鳥が飛んで行く。(空を見上げる) 白鳥かしら、雁かしら... あなたたち可愛いわね幸せそうだわね。(退場)

マーシャは家の中に入ろうとしない。ナターシャが牛耳る、抵当に入った家など入りたくないというより、“現場”から逃げたいのである。同じ台詞が(185・31-33)にもう一度。ヴェルシーニンとの別れで泣き崩れたマーシャをオリガは家のなかに入れと落ち着かせようとするが、マーシャは断固拒否。

アンドレイもナターシャにたいし残酷な言葉を吐く。「みんな出て行って、家には自分ひとりしか残らない。」チェブトィキンが驚いた様子で「奥さんは？」と問い返す。アンドレイはよくぞ訊いてくれたとばかりに語る(178・24-37)。

妻にもいろいろある。彼女は誠実で、きちんとした、それに善良な女性だ。彼女にはなにか彼女を小さな、盲目的、なんというか棘のある動物にまでおとしめるものがある。いずれにせよ、彼女は人間じゃない。胸の内を明かせる友人としてあなたに言いますよ。私はナターシャを愛している。そうそれはそうだが、ときとして私には驚くほど下品に見える。そういうときに私は我を忘れ、なんで彼女を愛しているのか、あるいは少なくとも愛したのか分からなくなる。

イリーナと男爵の決闘

イリーナの不安どおり、トゥゼンバハ男爵はサリョーヌィと決闘することになっていた。サリョーヌィは男爵を脅かすだけだというが、香水を両手にかけてながら「死体のおいがする」(179・17-21)と独り言。だが、誰の死体かまで彼は言わない。

決闘の前にイリーナとトゥゼンバハの長い対話が挿入される(180・1-181・34)。イリーナはトゥゼンバハが心ここにあらずだと言う。男爵は「すぐに戻る」といって出かけようとする。イリーナを愛し始めてから5年になるが、まだ慣れない。ますます美しくなる。「明日わたしはあなたを連れて出て行く。働きましょう、豊かになろう、私の夢は甦った。あなた、幸せにします。でも、ただ一つ残念なのは、あなたが私を愛していないこと。

イリーナ：それは私の力が及ばないこと。あなたの妻、貞淑で、従順な妻になります。でも愛情はありません。どうしようもない。私は生まれてから一度も愛したこ

義姉ナターシャと小姑三人

とがない。ああ、私は愛のことをあれほど夢見た、もうずっと前から夢見ている。昼も夜も、でも私の心は、蓋をしたまま鍵が無くなった高価なピアノみたいなもの。あなた、不安そうな表情。

トゥゼンバハ：この世に恐ろしいものは何もないが、その失われた鍵が私の心を苛む。眠れない。何か言ってくれ。

イリーナ：何かって何？あたり一面秘密だらけだわ。古い樹々はそびえるだけで何も言わない。(頭を彼の胸にもたせかける)

決闘がまもなく行われるというのに誰も何もしないのは理解しがたいことである。肝心のイリーナは、男爵との長い話しのなかで決闘のこと、男爵が死に直面し、死をなかば覚悟していることを理解できなかった⁵⁰。この点について演ずる側に疑問があり、俳優の一人がチェーホフに真意を問う手紙を送った。それにたいしチェーホフはつぎのように答えている。「イリーナは男爵が決闘に行くことを知らなかった。ただ、前の日に重大な事件があり、それが由々しき結果を招くことになりそうだという予感を持っていた。その謎が解けたとき「女性は、分かってたわ、分かってたわ」と言のです⁵¹。

イリーナは聞いたことから、結論を出さそうとしなかった。結果を告げられて初めて「分かってたわ」と言うのである。一方、周囲の人々は分かっている、決闘を止めさせようとはしなかった。作者はそのように書いている。この「分かっているでも何もしない」がこの劇のポイントである。

アンフィーサの幸福

それでもオリガは有益かつ幸福感を与えることをした。彼女とともに軍人たちとの別れにやってきた年老いた婆やのアンフィーサがイリーナに言う(183・10-19)。

アンフィーサ：今日は、アリーシャ。(キスする)お嬢ちゃん、私、生きてますよ。ええ、生きてますよ。女学院の官舎よ、素晴らしいよ、オリュージャと一緒にね。年取った私に神様が幸せを与えてくださった。生まれてこのかた、罪深い私はこん

50 男爵はイリーナに重要書類の保管場所を伝える(181・18-19)。最後に「今日コーヒーを飲まなかった。私にコーヒーを淹れるように言ってくれないか」と頼んでイリーナとの長い会話は終わる(181・24-26)。そのあとイリーナは舞台奥手でブランコに腰掛ける。子供っぽい動き。同じ場面にアンドレイが乳母車を押して入ってくる(181・27-29)。

51 質問したのは下士官フェドーチク役の俳優チホミーロフであった。書簡9巻、3254番、1月14日付。p.181.注釈にはチホーミロフの手紙の一節が引用されている。「イリーナはトゥゼンバハが決闘に行くことを知っていたか、あるいは漠然と推測していただけか」と質問し、「自分は推測していただけだと思うが、他の俳優たちは「分かってたわ」の台詞に惑わされている。いま第四幕の稽古が進行中で、イリーナを誤った光で照らさないためにも、この問題をはっきりさせることが重要です」。p.471.チェーホフは推測してただけ、と答えた。

な暮らしをしたことがなかった。お上の立派な宿舎。私もまるまる一部屋もらって、おまけにベッドまであるんですよ。夜中に目を覚ますと、聖母様、私はだれより幸せです、って感謝してますよ。

オリガは女学院長就任にあたって老齡の召使アンフィーサを連れて官舎に移った。親切であり、ナターシャへの譲歩である。『三人姉妹』のなかでもっとも幸福なのがアンフィーサである。貴族屋敷では床に寝させられる召使もいた(「花嫁」参照)。年老いて、追い出される恐れがあったのに、アンフィーサは、オリガとともに学院の院長宿舎に移り、彼女が言うように、ベッドつきの一部屋をあてがわれ、安楽に暮らせるようになった。とりわけ彼女にとって嬉しかったのは、それが官舎、すなわちツァーリ=国家支給の部屋であったことであった。ロシア農民はツァーリ=国家から見放されて生きているという思いを抱いている。そのツァーリの庇護を死ぬ前に得ることができた。これ以上の満足はなかったのである。

アンドレイとナターシャ

アンドレイが耳の遠いフェラポント相手に(つまり、観客に)自分の不遇をかこつ独白を行う(182・30-35)

私の過去はどこへ行ってしまったのか。昔は若かった、陽気だった、賢かった。夢をみて精妙な思考をめぐらすことができた。現在と未来が希望で輝いていた。ところが、生き始めるやいやな、われわれは退屈に、灰色に、面白くなく、怠慢に、無関心に、無益に、不幸になる。

これが地方都市のせいだといわんばかりに話は続く。

わが町は200年の歴史を持ち、10万人が住んでいる。しかし、他人に似ていない者、傑出したものは、過去も現在も一人として出ていない。学者も芸術家も、ちょっとでも目立つ、妬みや真似しようという気をおこさせるような人間が出ていない。ただ、食べて、飲んで、寝て、退屈な暮らしを紛らわすために、汚い噂、酒、トランプ、金儲けをしている。妻は夫を裏切り、夫は嘘をつき、何も見ない、何も訊かない振りをしている。そして手のつけようのない俗物根性の影響は子供たちを押し殺し、神から授かった火花は消え、父親や母親と同じように、哀れな、似たりよったりの亡者になる。

それにたいしナターシャは厳しい。当然話が耳に入っているはずだが、騒音でしかない(182・30-25)。

義姉ナターシャと小姑三人

ナターシャ：（窓で）誰ですか、そんなところで大声でしゃべってるのは。アンドレイ、あなたなの？ ソーフォチカが目を覚ますわよ。（フランス語で）ソフィーがもう眠ったんだから、音を立てないで。あなた不器用な熊ね。（怒って）もしお喋りしたいのなら、赤ん坊の乗った乳母車をだれかに頼みなさい。（ロシア語で）フェラポント、ご主人から乳母車を取りなさい。

ヴェルシーニンの別れは辛いものであった(184・33-185)。その最中、遠くで銃声が一発響く(185・21)。これはイリーナのトゥゼンバハとの別れだ。

一方、ナターシャはますます調子に乗ってくる(186・9-20)。

ナターシャ：（小間使いに）何ですって？ ソーフォチカはプロトポポフさんに見てもらいます。ボービックはアンドレイに子守して貰いなさい。子供って面倒だね。（イリーナに）イリーナ、あなた、明日出て行くんですって。とっても残念だね。もう一週間くらい家に残りませんか？（中略）あなたといるのに慣れたわ。簡単にお別れできるとお思い？ あなたのお部屋にバイオリンともども移るようアンドレイに命じるわ。あそこで存分のこぎりを引くがいいわ。で、彼の部屋に私とソーフォチカが移ります。素晴らしい、奇跡みたいな赤ん坊よ。なんていう娘でしょう。今日なんか、ちいちゃなお目々で私をみて、"ママ"て言うの。

そして最後はほとんど勝利宣言である(186・22-31)

ナターシャ：つまり、明日からここは私の天下。（溜息）一番に、この縦の木並木の伐採を命じる。それからこの楓。夜になると、無気味で醜悪なんだから。（イリーナに）あなた、その帯、あなたの顔に似合わないわ。悪趣味ね。もっと明るいものでなくちゃ。それに、この辺にはいっぱい草花を植えさせる。花の香りが漂う。（厳しく）なんでベンチにフォークが転がってるのよ。（家の中に入って小間使いに）なんでこんなところにフォークが転がっているのよ。聞いているのよ。（叫ぶ）お黙り。

ナターシャは夫、さらにはプロトポポフを颯使する(186・36-38)、マーシャの夫クルリギンはマーシャのために動く(186・37-187・2)。軍隊の行進曲が鳴っている。

マーシャ：わたしたちの兵隊さんが出て行くわ。無事な行程を！ さあ、家に帰りましょう。私の帽子と肩掛けはどこ？

クルィギン：ぼくがとってくる。家の中から。

オリガが「さあ、これでそれぞれ家に帰りましょう」と言い、これで結末かと思わせたところで、決闘の結果が伝えられる(187・3)。イリーナの反応はただ一言だった(187・20)。

イリーナ：私、分かってたわ、分かってた。

三人姉妹からそれぞれの女性へ

この後三姉妹がよりそって、それぞれモノログを述べて幕。これは三人が第一幕から第四幕までの時間と経験をへてどこまで変貌したか、見方・考え方・感じ方がどう変わったかを示すものである。

最初にマーシャ(187・26-29)。もっとも短い⁵²。

マーシャ：ああ、音楽が聞こえてくる。部隊が出て行く。一部隊は完全に行ってしまった。永遠に。私たちだけがここに残って、人生を新たに始める。生きなければ、生きて行かなければいけない。

次はイリーナである(187・30-37)。

イリーナ：(頭をオリガの胸に置き) 時が来れば、どうしてこうなのか、何のために苦しむのか、皆が知る。もう秘密はなくなる。でもそれまでは生きなければ... 働かなければならない。ただ働くしかないわ！明日、私は一人で出発する。学校で教え、もし私を必要としてくれ人たちがいたら、私の一生を捧げる。今は秋。もうすぐ冬になって雪が舞う。でも私は働く、働くわ。⁵³

最後にオリガの長い台詞(187・37-188・7)。

オリガ：(二人の妹を抱きしめながら) 音楽はあんなに陽気で元気。生きたくなる。ああ、神様。時が経てば、私たちにも永遠の別れが来る。私たちは忘れられる。顔、声、それに何人いたかも、忘れられる。でも苦悩は私たちの後から来る人の喜びになり、幸福と平和が地上に生まれる。そして今生きている人びとの良いことを思い出し、祝福してくれる。いとしい妹たち、私たちの人生はまだ終わっていない。生きて行きましょう。音楽はあんなに陽気で、楽しそう。もう少しすれば、なぜ生きるのか、なぜ苦しむのか分かるわ。これが分かれば、これさえ分かったら。

52 初稿では「私は生きて行く、姉妹よ。生きていかなくちゃ。(上を仰ぐ) 私たちの上を渡鳥が飛んで行く。何千年も、春と秋に飛んでいる。でも何のために飛ぶのか知らない。それでもこれから何千年も飛び続ける。神さまが秘密を明かすまでは」これはトゥゼンバハの台詞の反復である。彼は人間の生に意味などないと主張したときに、渡鳥の例を出した。それにたいしマーシャは意味、目的がなければ、人生価値がないと反論したのであった。作品第13巻、校異、p.308. 本文187・28-29行への注。

53 末尾の「もし... いたら」に相当する *может быть* は上演直前の挿入(同所)。

義姉ナターシャと小姑三人

マーシャは第一幕から一步も二歩もひいてこのプロゾロフ家を見ていた。重要場面に遭遇すると、身を引いていた。ヴェルシーニンとの別れはつらいものであったが、夫が気づかなかったふりをしているのを幸いに、夫のもとに戻ってゆく。すくなくとも当面のあいだは。

イリーナは、自分を取り囲む秘密・謎の雲から抜け出せたようである。「今は秋。もうすぐ冬になって雪が舞う。でも私は働く、働くわ」の台詞は印象深い。

オリガはまだ苦悩を背負っている。イリーナからこの世の謎・秘密を受け取っている。二人の姉妹の分まで背負っているかのようである。ヴェルシーニンが乗り移ったかのようでもある。

スタニスラフスキーは「最後の希望を抱かせる」あるいは「元気付けるような」台詞と考えていたようであるが⁵⁴、どうもそうとは思えない。ただ、三人ともに前を見ながら歩き始めるようとしていることだけは確かである。

結論

『三人姉妹』のもっとも単純明快な説明は、悪魔がナターシャを送り込み、地方の教養ある上流家庭、そのサロン、そして家族それぞれの夢を破壊した。その悪魔はチェーホフその人だとすればシェストフ流のチェーホフ批判となる。

チェーホフは三姉妹に深く共感していた。また彼女たちの生き方の限界と苦悩を十分すぎるほど理解していたため、共感は深かった。この共感は姉妹それぞれにたいするいわば優しい眼差しとなって、舞台に独特の雰囲気を生んでいる。モスクワ行きは結核でヤルタに「流刑」となったチェーホフの夢でもあった。モスクワには恋人オリガ・クニッペルがいた。そして彼女のためにマーシャ役を作り出したのであった。

この共感を決して三姉妹の視点からドラマを作ることを意味しなかった。三姉妹の行動がつねに周囲に不協和音を引き起こすように描かれている。作者の視点は三姉妹とナターシャの間を漂っていた。第一幕では、抱き合うアンドレイとナターシャを見て驚く兵士の目が作者の目に近い。そしてこれは観客の視線とも重なるのである。

第二幕では家に招き入れられなかった仮装芸人、ナターシャを迎えに来たプロトポポフが作者の視点だろう。第三幕では火事がそれだ。第四幕は去ってゆく軍隊であろう。

このような視線から作者はナターシャを描く。彼女は「マクベス夫人」となって、子供の健康や夫の出世のため、さらにはそれを口実に、自らの欲するところを手にしてゆく。それは夫を精神的不能に陥れて賭博に追いやり、世間の嘲笑をまねき、

54 上の脚注21参照。

譲歩を余儀なくされ、俗物根性を目目の当たりにさせられた小姑たちに大きな苦痛を与え、時には怒りを招く。

一方では無為の美学、待機の姿勢、過ぎ行く時間の快感、喪失の甘美。他方ではむきだしの、なりふりかまわぬエゴイズムの追求。一度だけオリガがナターシャと対決するが、その根拠は自身の心身の痛みであった。これでは敵わない。

オリガの親切心はアンフィーサにこの上ない幸をもたらしたが、ツァーリのお恵みに与ったというものであった。

他方ナターシャは子供部屋問題で詳しく論じたように、「結核予防」という大儀名分があった。これをずばり言わなかったところがチェーホフの特有のはにかみであり、粹であった。チェーホフ個人としては、結核こそこの作品にたいする隠れた視点であった⁵⁵。

なぜ一人の女性がナターシャのようなエゴイズムの追求に駆り立てるのか。言いたくないが、まるで家庭内ポリシェヴィキである。突き詰めれば父親の不在、軍隊の残した空白に象徴される、政治制度、社会制度の貧困が原因であるが、それが整備されるまでは個人の努力しかない。その積み重ねは社会を変えるかも知れない。

芝居から教訓を引き出すのは野暮の骨頂だが、敢えて言えば、生活の条件を改善は、それを言う人の"善悪"と関係なく、むしろ高貴なる夢はそれを見えなくする、となる。

55 古い医学書を見ると結核がいかに大変な病気であったかが分かる。J. von Mehring's Lehrbuch der Inneren Medizin, herausgeb. von L. Krehl, Erster Band, Jena, 1922, S. 277-313. 初版は1901年である。プロシヤでは1875年、10万人あたり35人いた結核死亡者が1909年には17人まで減少したと述べられている(S. 307)。